第３２回 福島県建築文化賞　総評

福島県建築文化賞は、東日本大震災による２年間の中断を挟んで継続され、本年で３２回目を迎えた。

今回の応募作品は合計５０件で、うち公共建築物が１８件、民間建築物が３２件であった。用途別では、学校教育施設が１４件と最も多く、次いで福祉・医療施設等が１３件、文化・スポーツ施設等、商業施設等が各７件、庁舎・事務所等が３件、リゾート・観光・宿泊施設等が２件、共同住宅、工場等、古い建築物の修復、建築物群又は建築物等が各１件であった。また、地域別では、浜通り８件、中通り２７件、会津１５件であった。

応募傾向として、民間の応募割合が増えて約６割を占めたこと、学校教育施設や福祉・医療施設が多かったこと、東日本大震災等の影響もあって、前回同様に浜通りからの応募が震災前に比べて少なかったことなどがあげられる。

一次審査は８月１２日に公開で、書面による現地審査対象作品の選考が行われた。審査方法としては、各審査委員が当日会場に用意された応募書、図面、写真に目を通して内容を確認の上、現地審査の候補として推薦する作品を１１点以内で投票した。その結果をもとに、多くの審査委員が推薦した作品、少数であっても強く推薦のあった作品について意見を述べ合い、評価すべき内容を確認するとともに共通理解を深めた。議論を尽くした結果、最終的に１４作品を全会一致で選定した。その内訳は、公共建築物が５作品、民間建築物が９作品であり、地域別では、浜通りが２作品、中通りが８作品、会津が４作品であった。

二次審査は１０月１９日から２１日まで３日間にわたって、全審査委員が一緒（一部は別）に、一次審査で選定された１４作品について現地審査を実施した。その後、各審査委員は、周辺環境との調和、建築物のデザイン・機能性、東日本大震災からの復興に対する貢献など、賞の基準に照らし多角的な視点から評価を行い、正賞、準賞、優秀賞として５作品、特別部門賞として３作品、復興賞として３作品を、評価理由を添えて推薦した。

最終審査は１１月６日に、７名の審査委員全員出席のもとに行われた。はじめに本賞の趣旨、存在意義を改めて確認した上、各審査委員が推薦する作品の評価理由等について意見を述べた。その後、委員間で真摯かつ率直な意見交換を行い、本賞の趣旨「建築文化」にまで遡って検討がなされた。推薦作品の評価が拮抗して意見が分かれるところもあり、予定時間を超えて白熱した議論が交わされた。その結果、最終的に下記のとおり、正賞１点、準賞１点、優秀賞３点、特別部門賞３点、復興賞３点の受賞作品が選定された。

以下に各賞の作品選評をまとめて報告する。詳しくは受賞作品ごとの講評を参照されたい。

正賞の『矢吹町立矢吹中学校』は、東日本大震災前から町民や教職員が計画づくりに参加し、完成直前に旧校舎が震災による被害を受けるなど、様々な困難を乗り越えて完成された。敷地の高低差を活かした配置計画に加え、図書館と中庭を核に普通教室や特別教室などを有機的に繋げることにより、内外部空間とも豊かな環境が作られている。町に唯一の中学校として地域に開かれ、多くの思いが込められた魅力的な学校建築となっている。

準賞の『菊池眼科』は、周囲のやや混然とした商業・住宅地の中にあって、装飾を削ぎ落としたシンプルな外観が力強く、大きな開口が街とクリニックの内部空間とを結んで印象的

である。合理的な動線によるシンプルな空間に家具やサインが一体化されて、建築としての質の高さが感じられる。

優秀賞には、『二本松市立 とうわこども園』、『アルテマイスター保志』、『かなや幼稚園』の３作品が選ばれた。

『二本松市立 とうわこども園』は、東日本大震災による計画変更などの困難を乗り越え、郷土愛をコンセプトに建設された。アプローチにかかる柔らかな曲線を描く木造のキャノピーが登園する子どもたちへ期待感を演出し、地域材を活用した様々なアイディアにより工夫を凝らしている。

『アルテマイスター保志』は、仏壇仏具店のショールームとして市街地の一角にシンプルな佇まいで存在する。エントランスホールの水盤がゆらぎの空間を静かに演出して道行く人の目を止め、内部へと誘導する。デザインの専門家集団の協働により、新しい祈りの空間を創り出している。

『かなや幼稚園』は、膜屋根と木構造の組み合わせによる中央ホールの空間構成が印象的である。家具や遊具のデザイン、サインなど細部に至るまで子どもの世界を実現しようとする設計者、それに託した建築主の思いが十分に感じられる作品である。

特別部門賞には、『ＩＤＣフロンティア 福島白河データセンター』、『会津坂下町 気多宮 街なみ交流センター』、『喜多方市 地域・家庭医療センター「ほっと☆きらり」』の３作品が選ばれた。

『ＩＤＣフロンティア 福島白河データセンター』は、データ集積管理の拠点として、地域の自然気候を活かして外気導入を図るための形態と設備を外観と結びつけ、景観のポイントとなる建築を実現している。国内最高水準の省エネルギー施設となっており、技術的にも高く評価できる。

『会津坂下町 気多宮 街なみ交流センター』は、東日本大震災により倒壊の危機に瀕した蔵を、寄贈者、発注者の町などがそれぞれの想いを共有し、設計者、施工者がそれに創造的に応えている。その成果が居心地の良い地区集会所となり、伝統的な建築技術の保存・伝承や街なみの保全にも繋がっている。

『喜多方市 地域・家庭医療センター「ほっと☆きらり」』は、住宅地の中にあって、傾斜屋根の落ち着いた外観、居心地の良い待合空間が人々を迎え入れる雰囲気を醸し出している。建築主と設計者の協同により機能的に診察室まわりが計画され、家庭医療という新しい医療のあり方を実践する場として、各地への普及が期待される。

復興賞には、『桜の聖母学院幼稚園園舎』、『飯坂温泉「なかむらや旅館」』、『日本全薬工業株式会社 研修管理棟』の３作品が選ばれた。

『桜の聖母学院幼稚園園舎』は、東日本大震災により半壊したが、園児の健康を第一に考えた園の基本方針のもと建て替えられた。屋内遊び場の「なかよし広場」が印象的であり、地域の幼児のために解放していることと共に、子供へのまなざしと深い愛情が感じられる。

『飯坂温泉「なかむらや旅館」』は、東日本大震災により甚大な被害を受けたが、失意と諦

めから立ち直り、復興への意欲を蘇らせ、由緒ある生業（なりわい）と歴史ある建物を再生した。建築主、設計者、施工者が三位一体となった取組は高く評価でき、敬意を表したい。

『日本全薬工業株式会社　研修管理棟』は、東日本大震災での被災を機に、地元企業としての歴史を大事にし、環境共生を図るとともに企業イメージを発信する役割を付与した建築を豊かな空間構成により実現している。

惜しくも選外となった作品もそれぞれ見所があった。『福島再生可能エネルギー研究所』は、福島の復興、次世代エネルギーの開発拠点として、短期間という条件の中で、機能性を優先しシンプルにデザインされており、新技術を生み出す拠点を県内に持つ嬉しさが感じられた。『小野屋漆器店　Ａ・Ｏ・Ｉ』は、鉄骨造の軽快な構造に、ガラスに蒔絵を施すなど伝統的な漆の技術が組み合わされ、興味深いアイディアが随所に見られる佳品であった。また『相馬市民会館』は、歴史的拠点における街なみの形成に周辺公共施設と一貫して取り組んでいる和風デザインの外観が寄与しており、文化の復興にいち早く取り組んだ設置者の姿勢は高く評価される。

本年も、建築、まちづくり、様々な人々に支えられているのだということを実感でき、審査員一同、大変幸せな思いがした。

現地審査を通じて実感したのは、東日本大震災が様々な形で作品に影響を及ぼしていることであった。１つ目は震災による計画の中断、変更、再開、２つ目は震災で被災した建築の復興とその経過に表された失意から立ち直る熱意と努力、３つ目は震災以後に新たな使命を担った計画の始まりである。これらを通して建築の様々な課題と可能性を改めて感じた。

今後は、震災以後の本格的な建設事例が増えてくるであろう。その中には、住宅だけでなく心の渇きを癒やす文化に接し、地域の様々な活動を支える施設も求められることになる。その実現を通じて福島の復興が広く伝わるようになることが今から期待される。建築の持つ人に喜びや勇気を与える力をもって、新しい福島の建築文化が発展することを願っている。

最後に、忘れてならないのは、受賞作品だけでなく、残念ながら選外となった各応募作品が本賞を支えていることである。今回の全応募作品の関係者に対して、審査委員一同、深く敬意と謝意を表したい。

審査委員長　長澤　悟